

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 123 号

平成24年7月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より（2）

第2講 パウロの自己紹介（1）より

キリストを受けることを、救われたという

この部分（ロマ書第1章1節から7節）を繰り返し読んでみると、「イエス・キリスト」という字が段々大きく見えてきて、手紙を書いたパウロも、あるいは、手紙の受け手であるローマの信者も皆消えてしまう。所詮、キリスト教というものは「キリスト」がすべてです。救いも何もかも、皆キリストによる。彼を受けることを、救われたというのです。自分の行ないや自分の心の状態、「自分の」と付くもので救われるのではない。「キリストの贖い」によって、「イエス・キリスト」によって、救われるのであります。この部分を原語で読みますと、特にその感が深い。

（P.22）

称名から称名へ

称名の行も献身の行も共に大切でありますけれども、特に「称名」が大事であります。これらの二つの行が本当に分かってくると、信(個人の救い)が分かって来る。また逆に、信(個人の救い)から行(称名、献身)が出てくる。人間の道徳を解決(aufheben)するものは「信」であるし、また、「信」の問題を解決するものは「行」であります。しかもその行は、難しい行では駄目です。万人に可能な行でなければいけない。「称名」は、誰にでも可能な行であります。

そこで、私はこの図の上の方に書かれている「信仰から信仰へ」を、「称名から称名へ」と変えました。なぜなら、信仰の現れが称名ですから。「義人は信仰によって生きる」という文句は「義人は称名によって生きる」と書き換えても宜しい。もしも日本人に生まれなかったなら、私はこのことに気付かなかっただろうと思います。「信仰」ということに引っ掛かってそのために信仰は難しい、続けられないということになってしまう。恵心僧都は、「妄念の中で称名せよ」と言われた。妄念とは、信仰がないことです。「信仰がないままで御名を称えよ」ということです。ここで、私はパッと分かった。信仰がないままで出来ることと言えば、この「称名」だけです。「称名」によって落第生が救われること、これが福音であると思う。優秀な人が救われるのであればたいしたことではありません。どうしようもない者が救われる、これを、「イエス・キリストの贖い」という。

(P.19)

よき人の仰せを被^こりて信ずるほかに別の子細なきなり

私は、日本人に生まれたことを感謝しています。ちょっと勉強さえすれば、横文字も多少は読めるようになる。そして、日本の古い文章も読める。西洋人には、歎異鈔などは読めません。私の仏教の先生であった島村清吉先生は、この歎異鈔は、将来外国人が日本語を勉強して研究する日が必ずやってくると言われました。横川^{よかわ}法語には、「また曰く、妄念はもとより凡夫の地体なり。妄念のほかに別に心は無きなり。臨終の時までは一向妄念の凡夫にてあるべきぞと心得て念仏すれば来迎にあずかりて蓮台に乗ずる時こそ妄念をひるがへして覚りの心とはなれ」と書いてありますが、我々ならこの言葉の意味をそのまま理解することができる。何と日本人は幸いではありませんか！ 仏教の先輩、恵心、法然、親鸞らの書いた文字が読めるのですから。「ただ念仏して弥陀に助けられまゐらすべしとよき人の仰せを被^こりて信ずるほかに別の子細なきなり」という親鸞の言葉は、もし西洋人であったなら、恐らく10年も20年もかかって日本語を勉強しなければ分からないでしょう。我々日本人にとっては、あまりにもありふれている、あまりにも立派な宝ですから、かえってその宝が分からないのだと私は感じます。

(P.23)

第3講 パウロの自己紹介(2)

キリスト・イエスの僕、神の福音の為に選び別たれ、召されて使徒となったパウロから (ロマ書1章1節)

ユーアンゲリオン(福音)がロマ書の中心問題

(ロマ書1章1節)「神の福音のために選び別たれ」について説明します。「福音」とは、「よき知らせ」のことです。内村先生は、「ユーアンゲリオン」という原語をお挙げになり、「言葉というものはその性質をあらわす。ユーアンゲリオン、この言葉には何とも言えない優しい響き、人を慰めるような響きがある」と仰せになった。50年前に聴いた先生のこの言葉が私の耳にまだはっきり残っています。「ユーアンゲリオン(福音)」、これがロマ書の中心問題であるばかりなく、新約聖書、旧約聖書全体の中心問題であります。福音とは読んで字のごとく、「よき知らせ」です。「善行をせよ」とか、「偉い信仰を持て」とか、そういうことではありません。信仰を持つということは難しいことでもあります。...

この「よき知らせ」、新約聖書の「福音」は、厳密な意味において、パウロの発明によると言えると思います。ロマ書を繰り返し読めばそれが分かる。これは、パウロの新発見です。それを書いてあるのがロマ書であります。人類の二千年の歴史において、最も大いなる貢献をしたのはこのロマ書です。四福音書は、このロマ書に及びません。四福音書は、ロマ書の説明にすぎない。オーガスチンのローマンカトリック、ルッターのプロテスタント、また、ジョン・ウェスレーのメソジスト、これらは皆ロマ書によったと言えます。ロマ書なくして、オーガスチンなく、ルッターなく、ジョン・ウェスレーはない。... 人類の本当の宝と言われるものは、この数千年かかって蓄えられてきたものであります。新しい真理といっても、古き真理を発見するにすぎない。我々の信仰もまた同じです。我々の信仰と言っても、それは、パウロ、ルッター、あるいはウェスレーのであります。 (P.27)

聴いておけ 覚えておけ

諸君！この「福音」の内容をはっきり聴いて下さい。信ずる、信ぜぬ（私は信じてもらいたいけれども）は諸君の自由ですが、しかし、福音というものはこういう「よきおとずれ」であるということだけは、聴いておいて下さい。これが私の願いです。これが諸君の役に立つ時が必ず来ます。君たちが死ぬ時に必ず役に立つ。そして、もう一つ、キリストが再び来給う時に役立つ。どちらが先に来るかは分かりませんが。私の説く福音は、この世において偉い人になるとか、この世において善行するとか、あるいは、大きな事業をするとか、そのような目的には役立たないかもしれません。しかし、この世で肉体が朽ちるときには、必ず役に立つ。肉体が朽ちるのに、二つの方法があります。すなわちキリスト再臨の時と、キリストが来られる前に我々が死ぬ時。この、人間にとって最も重大なる時に、この「福音」が役に立つ。内村先生は言われた。「諸君、君達は今、十字架の贖いということは分からないかもしれない。分からなくとも宜しい。信じなくても宜しい。聴いておけ。覚えておけ。死の波河を渡る時に思い出せ」と。私は、学生時代に聴いたこの言葉を覚えています。内村鑑三の福音は、そういうものであります。

(P.30)

私は、福音を述べ伝える

繰り返しになりますが、ビタカンファーである福音の内容は、「我々の状態如何にかかわらず、神がその独り子を十字架につけ、我々の罪（悪い所）を帳消しにして、我々に永遠不滅の命を与えて下さった」ということです。...宜しいですか！パウロの使命は、福音を述べ伝えることに尽きる。私もまた伝道者のはしくれですから、パウロにならって、その使命は福音を述べ伝えることだけです。諸君！私に他のことを要求しないで下さい。この小西が、福音を述べているか、いないかということだけを見て下さい。他に善行をせよと勧めて下さるな。私は善行をする気もないし、私にはその力もありません。福音を述べ伝えること以外の善行をどうか私に勧めないでください。他の善行は私をくるしめるだけです。しっかりと聴いておいて下さい。病人を訪れて魂を慰めよとか、あるいは、他のいわゆる牧師らしい善行も、私には要求しないで頂きたい。牧師としての精神が足りないと思われる方は、他の教会へ行って頂きたい。福音を信ずるか、信じないかは、どちらでも宜しい。私は、ここで福音を述べ伝えます。神の福音がどういう内容のものかだけを、はっきりと聴いておいて頂きたい。これが私の願いです。

(P.32)

信仰を学ぶには、先生が必要

要するに、本日のレッスンは、パウロが主格になっておりますが、この(ロマ書1章)1,2節をよく読むと、パウロが消えてきて、神、イエス・キリスト、および福音ということが表に浮かび上がってきます。この浮かび上がってきた「福音」がロマ書を中心、否、全聖書を中心です。これを全人類に知らせたい、聴かせたい、人類全てに贈りたい、これが「神の愛」であります。善行をせよ、とは第1に勧めておりません。人に対して愛を持つ、そんなことは難しいことです。しかし、永遠の生命が分かってくれば、人は喧嘩する必要がなくなるはずで、この世で立派な善行をして、人に褒められようなどという気持ちも自然となくなってくる。それが、キリスト教倫理と言われるものです。この世の倫理とは違います。キリスト教には、「この故に」という字が必ず付いている。福音が分かったら、「この故に、汝らに勧める。汝自身を捧げよ」と。私は、悪いことをする方が好きです。しかし、この福音の理解が進むにつれて、やはり神は善いことをする人がお好きですから、できるだけ善いことをしたい、努めたいと思うようになってくるのです。

福音を理解するためには、聖書の勉強が大切です。日曜日から次の日曜日まで、聖書が開かれずに棚に置いてあるようでは、日頃、聖書に親しめないようであれば、自分はまだ福音が分かっていないと思って間違いありません。神は聖霊を降して、伝道者を通して、聖書により、信仰を教えられます。諸君、信仰を学ぶには、必ず伝道者、先生が必要です。先生を持っていないということは、信仰がまだ分かっていないという証拠であります。幸い、私には内村先生がおられます。先生のお言葉、「神の義は律法道德とは無関係に」によって、福音が分からされました。こういうことは先生から初めて学ぶのであって、自分から沸いてくるものではないのです。福音は神の原理で、人間の原理ではない。従って、伝道者の口を通して、聖霊によって、神が我々に分らせて下さるものであります。我々には、先生が必要です。 (P.33)

第4講 パウロの自己紹介（3）

イエスの復活こそがキリスト教の中心

パウロは、ロマ書 8 章で「イエスは初穂であり、我々の長兄である」と言っています。イエスはその復活によって我々の復活を予告したもうたからであります。我々も復活して、復活された神の子の弟妹となるという福音を意味しております。このイエスの復活こそがキリスト教の中心であり、また、キリストの復活にまで人間を引き上げることを「キリスト教の救い」と呼ぶのであります。諸君！自分の救いの観念について、もう一度検討し直す必要がある。この「復活」ということが、パウロのすべてです。彼は、この復活を目当てとして、毎日を生きておられた。それ故、他の追隨を許さない力を持っておられた。ここに秘密がある。彼が人類の教師である理由は、ここにあります。

(P.39)

信仰の一手あるのみ

聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定められた。これが私たちの主イエス・キリストである。

(ロマ書 1 章 4 節)

(ロマ書第 1 章) 4 節の後半の「これが私たちの主イエス・キリストである」には、「イエス」、「キリスト」、「主」の 3 字が含まれており、これがキリスト教のすべてであります。「イエス」とは、ダビデの子孫として生まれたイエスのことであり、また、「キリスト」とはメシア、すなわち、ユダヤ人の救い主のことです。このイエスとキリストとは、時間と空間とによって制限されています。これに対し、第 3 番目の「我らの主」となりますと、ユダヤ人のみではなく、万民の救い主(ギリシア語ではキュリオス)、すなわち、再臨によって人類をさばき、人類を救い給う「キュリオス・神」であります。ですから、主・イエス・キリストと言えば、復活して、神の右に在して神の子の長兄となり、時来たらば、再臨して、人類を裁き給うところの「キュリオス・神」であり、これは、前二つのように時間と空間の制限を受けていません。この 3 節と 4 節とで、主・イエス・キリストの本質を明らかにしているのであります。私がいつも外国語に譬えているように、これは正に我々の知恵を超えた内容のものでありますので、これを理解するには信仰の一手あるのみです。

(P.39)

イエスの復活は初穂

第2の点は、キリストは、人間を通じて、復活されたということ
であります。人間という地位から神の力によって復活体となられた。
すなわち、人間の進化したもの、我々人間が行ける限界での神を意
味します。イエスが我々の手本となるのは、この世における33年
間の生涯のみならず、彼の復活もまた、我々の手本であります。我々
は、それを聖霊によって真似させて頂く。パウロはイエスの復活は
初穂であると言いました。イエスは長兄、我々は弟妹である。人間
の尊厳はここにあるのであります。

復活の主イエス・キリストの弟妹

第3の点は、「イエス・キリスト」は時間と空間に制限されているけれども、「主」と言うのは、神の子であり、再臨して、人類を裁き、自分が長兄として弟妹をつくるために十字架について、そして復活されたということを述べました。復活・再臨を理解するためには、聖霊のはたらきが必要です。

以上、この3, 4節の中に、キリスト教の深い真理が、すべて出てきております。聖霊が我らに臨む時、我々は神の子とせられ、キリストが来給う時、復活して、彼に似た者、すなわち、復活の主イエス・キリストの弟妹として頂く。これがキリスト教であり、それ以外をキリスト教とは言いません。

(祈り)

御在天の父様、誠に世界の大聖書学者を悩ましたこの3, 4節は、実は簡単明瞭でありまして、主・イエス・キリストが、十字架について、復活し給うて、我々の罪を贖い給うた故に、我等もそれを信じて、復活するものとなり、イエス・キリストの復活と同じ体を頂いて、彼の弟妹として、永遠無限の存在となる、内村先生はこれをキュリオス教と仰せになりましたが、我等、このキュリオス教を真に聖霊によって理解する日が一日も早く我々に臨んで、力強くこの人生を生きる者となることができますよう、主よ、我々を憐れみ給え。御名によって祈り奉ります。

(P.41)